



はじめに

ニューヨークを拠点に映画を作っている僕が、縁あって岡山県岡山市で、精神科診療所「こらゝる岡山」に通う患者さんたちと、その世界にカメラを向けることになった。そしてそれをドキュメンタリー映画にまとめ、『精神』（観察映画第二弾）と名づけた。

精神病について語ることもそのものが憚られるこの世の中で、精神科の患者さんをドキュメンタリー映画の被写体にするには、これまで一種のタブーとされてきた。特にモザイクを使わず素顔をスクリーンに映し出すことは、日本ではほとんど試みられたことがなかった。

でも、僕はあえてそれを実行したかった。精神科を覆い隠しているベールをカメラの力で剥ぎ取り、虚心坦懐に見つめてみたい、個人的な理由があった。同時に、閉塞感と孤独感に覆われ、心の病が蔓延しつつある現代のニッポンで、それをすることに特別の意味を感じたのである。

完成した映画は、ベルリン国際映画祭など世界中の映画祭に招待され、釜山国際映画

祭やドバイ国際映画祭では最優秀ドキュメンタリー賞をいただいた。マイアミ国際映画祭では審査員特別賞を、香港国際映画祭では優秀ドキュメンタリー賞を、さらにニヨン国際ドキュメンタリー映画祭では、宗教を超えた審査員賞などというユニークな賞までいただいた。映画として見応えのあるものになったのではないかと、ある程度満足もしている。

ただし、映画を作る舞台裏で、作品には盛り込めないけれども興味深い、数々の出来事があったのも事実である。また、映画が完成した後で起きたことや、それを広く公開しようとする過程で生じた波紋や議論には、ときに映画を上回る示唆を含むものがあった。

映画作家としては一種の敗北宣言かもしれないが、映画が生まれた背景や、作品からこぼれ落ちてしまった大事なことを、文章として書き記しておくことも、意義のある作業ではないかと思いついた。そうすることで、作品に対する洞察や、精神医療や精神障害者に対する理解を深めることにならないだろうか、期待しながら筆をとった。

本書では、この映画を撮るに至ったいきさつや、それを製作し世に送り出す過程を通して、僕が体験したこと、考えたこと、学んでいったことを、なるべく正直に、思うままに綴ってみた。また、映画に登場してくれた患者さんたちの作品に対する反応や、こ

らゝる岡山代表・山本昌知医師との対話、精神科医の斉藤環さんとの対談なども盛り込み、映画とはまったく別のアプローチで、改めて精神医療の現場に光を当てる作業を試みた。

断っておくが、僕は精神医療の専門家ではない。まったくのシロウトである。だからこそ、精神科にカメラを向けようという、後で考えれば無謀な試みも躊躇なくやってのけたし、専門家や当事者にとってはタブーなことも平気でやってしまう。そのせいでお叱りを受けたり顰蹙ひんしゅくをかったりすることもある。しばしばであった。しかし、そうした衝突や齟齬そごを記述することで、かえって物事の本質が浮び上がることもあると思う。映画をご覧になった読者には、いわゆるメイキングとして、そうでない方には、一種のルポルタージュとして、読んでいただけないかと思う。そう信じて、この本を書き進めていく。

目次



はじめに

003

第1章

社会と精神病者を隔てる「見えないカーテン」
精神科を「観察」する理由

013

見えないカーテン／保守的な土地で育つ

少年時代に見た宇都宮病院／東大に進む

『東大新聞』にのめり込む／突然襲った「燃え尽き症候群」

編集部を辞める／「燃え尽きて」生き方を見直す

新天地・ニューヨーク／異文化が共存する街

新鮮だった映画作り／偶然、ドキュメンタリーにのめり込む

番組作りに行き詰まる／精神の危機、再び／リストラされる

こころの岡山との出会い／なぜ精神科を撮るのか？

「観察映画」という方法論／「選挙」を先に撮る

「病んで」いるのは誰か？
カメラを通して精神病者と向きあう

「道徳映画」と「お化け屋敷映画」／古い民家を利用した「ローラー岡山」
いよいよ撮影が始まる／最大のピンチ
一〇人中、八、九人は「フー」家族の子承は？
揺れ動く被写体の心／契約社会アメリカなら？
美咲さんの心の揺れ／「オン」と「オフ」／診療所によるサポート
破綻した「ガラスで隔てられた観察者」——詩人・菅野さんとの出会い
今中さんとの問答／ミイラ取りがミイラに？
妻がミイラに？／どんな映画になるか？は編集作業で見える
吉澤さんとの会話／映画の構造を作り上げる
ドキメンタリーは主観の産物／藤原さんとの出会い
頭のネジ／固めた覚悟

『精神』をめぐる波紋

被写体に見せるか、見せないか／極秘で行われた試写会
釜山国際映画祭からの招待／チケットは完売
熱狂的だった釜山の観客／際立つ当事者の反応
最大の難関／健康な人の発想
みんなの命を守らなきゃいけん／いよいよ試写会の日
人生最大級の修羅場

私たちが映画に出た理由
登場人物との対話

人を裁くことはできない／悩んだ末に取った試写会
映画に出るのは「ゲリラ戦」／アングラ映画だと思っただけ
やっつもん勝ち／父親よりも山本先生／人薬が大切
三秒診察でも仕方ない／最後の切り札
どこを使うか？／「精神」に足りないもの／「精神」は予告編

精神を「治す」ということ
山本昌知医師との対話

映画「精神」を観て／「ミイラあるべき」が病気の薬／目標のもち方
病気は生き方を見直すチャンス／病気の人の声に健康な人が含まれる
山本医師の原点：閉鎖病棟の鍵を外す／誰が鍵を閉めているのか？
ことはスムーズに運ばない方が良く／社会的入院をする人の適応力
「見かけ上の効率」と「真の効率」／精神障害者と犯罪
「すっきりしたい」という気持ち／減り続けるグレーゾーン
撮影を許可した理由／信頼し、信頼される関係
精神医療の将来に対する危惧／全体は部分の寄せ集めではない
患者さんから学ぶ／「生産性」だけで人間は計れない
変わってはいけない／表面的に真似ても効果はない／誰のための制度が
障害者自立支援法の影響

『精神』という爆弾
各国で巻き起こった議論

ドバイで最優秀賞受賞／ベルリンへ「里帰り」
本拠地「ニューヨーク」で上映／いよいよ日本で初めての公式上映
東京で特別試写会／「モザイクなし」が被写体を守る／映画という爆弾

巻末対談

『精神』が照らす日本の精神医療
京藤 環×想田和弘

あとがき

